

# 石岡八幡宮の和歌資料

西条市氷見の石岡八幡宮は、神功皇后が半島から凱旋された時、天神地祇を祭ったという社伝のある由緒の深い神社である。その鎮座する岡は名所和歌の「橘島」に比定されている。

神主は代々玉井家で、当主は玉井忠臣氏である。初め大山為起の『東遊紀行』を拝見しに伺ったのであるが、蔵書を調査するうち、石岡八幡宮を中心とする歌壇の存在を示す資料が出てきた。それらの大略については『愛媛県史・文学』に紹介したが、今回はそれら和歌資料を翻刻し、今後の研究の便に供したい。

## 一、神祇講詠草

半紙本一冊。本文十五丁。書名は表紙、内題とも「神祇講詠草」。玉井忠幸の自筆本と思われる。虫食による損傷がひどい。

本書は玉井忠幸・忠俊父子を中心に、小松・丹原・壬生川地方の八幡神主の神主をメンバーとする歌会の記録である。表紙見返しに名を連ねている十一名が正会員で、それ以外の者は、その会毎に臨時に加った者であろう。享保十六年十一月忠幸亭での歌会を皮切りに、毎月、または隔月に会場持ち廻りで開き、同二十年まで続いている。県下の和歌資料

としては古いばかりでなく、歌会の記録としては唯一のものである。次に正会員としての名を記された者の住所と神社をあげておく。

白 方 勝

(国文学研究室)

豊田義堅 丹原町田野 綾延八幡宮

矢野義尚 東予市北条 鶴岡八幡宮(大気味神社)

日野真泰 小松町新宮 三嶋神社

伊佐芹重元 東予市周布 周敷神社

首藤知義 東予市吉田 徳威神社

越智義安 丹原町今井 福岡八幡神社

矢野義雄 東予市壬生川 保内八幡神社

宮原小敏 丹原町高知 高知八幡神社

佐伯正明 小松町 小松藩士か

なお、玉井忠幸は石岡八幡宮二十九代神主で、忠俊はその長男であるが早世した。忠幸は若き日父忠政とともに、元禄六年伊曾乃神社で開かれた大山為起の垂加神道式に参加して、一首を残している。その『東遊紀行』は忠幸が書写し所持していたもので、唯一の伝本である。その他冷泉家から入手したと思われる『五社譚合』『民部卿歌合』の写本も所持していた。忠幸のは幼名は忠信、また順候軒・安山とも号した。

二、〔詩歌雜稿〕（仮題）

横小本一冊。表紙なく、本文十丁。忠幸自筆の詩歌等の書留帳。和歌漢詩の他、「西泉一宮社神鏡由来」（漢文）、「和名抄集第六郷数部」（伊予の地名を抜粋）、「清少納言旁注」（注釈）を収める。いずれも宝永から元文にかけての書留である。なおここには和歌（並びに和歌と組になつてゐる漢詩）のみを抄出した。

三、〔柿本明神奉納詠〕（仮題）

小本一冊。表紙は破損してなし。本文十八丁。本文の初め四丁分は下半分が破損。「通題 納涼風」二十六首と「柿本明神法樂詠五十首」を収める。後者に「安永三年六月十八日納涼会当座」とあるので、前者もこれと同じ頃、やや先立って詠まれたものであろう。

柿本明神はいうまでもなく柿本人麿を神として祭つたもので、石見国の高角神社から勧請して石岡八幡宮の境内に小祠を建た。（現在は高角神社に合祠してある。）この時、周円法師は師の冷泉為村に請うて、高角神社詠九首を得ている（秋山英一氏「伊予に遺る冷泉為村の筆蹟」愛媛の文化第十六号）。この時期が従来不明であつたが、本書によって安永三年か、それよりごく僅か以前と限定できるようになった。また柿本明神を勧請したのは「石岡八幡宮社中」であるが、この記載によつて石岡歌壇、その結社の成立を知ることができる。玉井家は忠幸の後、忠俊は早世し、その弟忠宿が三十一代を継いだ、その死後、弟の忠成が三十二代を継いでいた。この忠成を中心に、周円法師をはじめ本書に名を連ねる者が、石岡八幡宮社中のメンバーであつたと思われる。父忠幸の始めた歌会が、ここまで発展してきたのである。

なお石岡八幡宮には人麿像は残つておらず、いわゆる人麿影供が行わ

れたか否かは定かでないが、本書はその可能性を示唆するものではある。「納涼風」は破損がひどく、和歌・作者名の判読できる五首のみを掲出した。

四、詠百首和歌

半紙本一冊。本文十九丁。表紙中央に題簽の剥落した跡があり、僅かに「歌」の字が残つているので、内題と同じ「詠百首和歌」とあつたと思われる。成立時は不明であるが、その一人、周円法師が安永四年十月十五日に歿しているので、それ以前、「柿本明神奉納詠」とほぼ同じ頃とみてもよいであろう。百人が百題のもとに各一首、最後が「祝言」で「願主 忠成」とあること、追加の「寄道祝」十一首すべて和歌の道の栄えを祝してゐることから、本書もまた柿本明神に奉納されたものと推測される。作者名の右肩に住所本名等が朱書してあるが、これがいつ記入されたものかは不明。

作者のうち、京都の歌人が十名入つており、中央歌壇との交渉の深さを物語る。冷泉家からは為村の詠はなく、その御内松永久雄が歌を寄せているほか、新玉津鳴神社の森河高尹・周尹父子、『近世崎人伝』の著で有名な伴蒿蹊などの名が見える。高尹は『花の下ぶし』（高鴨神社蔵）によると、歌の指導に來遊している。伊予では今治から川之江までの広い範囲の歌人が歌を寄せており、石岡八幡宮社中とは直接間接交渉のあつた歌人なのであろう。

今治の江嶋為親は今治藩家老、今治三代目の宗匠といわれた人で、紀行歌文『桂山の記』（今治市立図書館）がある。東予市実報寺の宥玉上人は為村門人、為村より同寺一樹桜の詠を得ている。周円法師と親しかつたやうで、周円の位牌・墓も同寺にある。このほど宥玉の雨乞いの歌十五首、効あつてそれに応えた周円法師の歌二十一首が発見された（高鴨

神社、鴨重元氏。「愛媛国文と教育」一六号に掲載。小松の渡部忠は『花の下ぶし』に來遊の高尹に随つて、丹原の佐伯貞中と吉野の花見に出かけ、帰途京都で出家して円浄と名のつたとある人で、『筑紫紀行』（高鴨神社蔵）がある。土居の加地丈助盛養も為村の門人、後東予一円の歌の宗匠になった人で、周円法師の『松葉集』の序文を書いた。

『神社講詠草』のメンバーの子孫としては、高知八幡神社宮原直昌、小松三嶋神社日野真亮、綾延八幡神社豊田義辰、周敷神社伊佐芹重辰がなお歌の道にいそしんでいる。また女性九名が入っていることも特筆されてよいであろう。

このようにみると、隆盛期を迎えた東予歌壇の歌人を結集して成ったのが本書であるといえよう。

## 五、源氏歌集

半紙本一冊。本文十二丁。表紙に「源氏歌集」と墨書してある。しかしこれは最初に収める「源氏歌集」をそのまま墨書したようなものであつて、本書の全貌を示すものではない。本書はその他数種の和歌資料を収めるが、編者、成立時は不明である。

「源氏歌集」は『源氏物語』の桐壺巻から末摘花巻までの歌を抜粋したもので、歌の右肩に詠者の名を記してある。（ここには未掲載）

「新玉津嶋奉納和歌二十首」は今治の連衆のもの。江嶋為正は、『百首和歌』の為親の父、木村正俊は今治藩儒医、多羅尾光品も藩士、その他備前屋正殊といった町人の名も見えるのが注目される。為正は宝暦六年に歿しているので、新玉津嶋神社との交渉は『詠百首和歌』以前より早くからあつたものと思われる。

「星夕言志七首」は夫甘光似の詠。光似は今治藩士夫甘権左衛門、半井梧菴編『ひなのてぶり』にも二首入集。

「小松御連衆点取」は小松藩家中のものとされるが、その実態を明らかにしえない。素姓の判明しているのは本善寺四世住職昌誉上人のみである。宝暦五年歿。（小松邑誌）

「昌誉詠」（仮題）は、「昌誉上」とあるので、歌の師に点を依頼したものであろうが、その師は不明である。

次に寛保元年八月冷泉為久閑東下向の節の詠が収められている。昌誉を始め為久の門人であつたのかもしれない。為久の歌そのものは伊子に關係ないので、ここでは省略した。

以上本書は石岡八幡宮には直接の交渉はないのであるが、忠成かその前後の誰かが収集したものであろう。

## 六、初春山

幕末期の石岡歌壇を知る資料に『初春山』一冊があるが、分量の關係でここには省略した。大略は『愛媛県史・文学』に紹介してあるので参照されたい。

翻刻に当たっては、原本に忠実なるを旨としたが、漢字は常用漢字を用いた。虫食の部分は□とし、判読できるものは、推定可能なものは□内にその文字を埋めた。また、詞書等については、句読点に当る箇所を一字あけとした。

本稿を成すに当り資料を提供された石岡八幡宮玉井忠臣氏には深く謝意を表す。

なお本稿は、文部省科学研究費補助・一般研究（C）「愛媛の国文資料の調査研究」の成果の一部をなすものである。

神祇講詠草

魅屋町五条上<sup>上</sup>丁

藤原義堅 田野 豊田近江守

源 寂中

同 義尚 北条 矢野出雲守

釜座姉小路上<sup>上</sup>所

同 真泰 新宮 日野豊後守

大橋 左中

周布重元 周布 伊佐芹刑部

醒井高辻角

知義 吉田 首藤中務

主 殿

紀 義安 今井 越智織部

魅屋町御池上<sup>上</sup>所

紀 義雄 壬生川 矢野加賀守

林 大学

同 忠幸 氷見 玉井木工助

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

同 忠俊

同 右近

神祇講詠草

享保十六<sup>辛</sup>亥十一月始

社頭松

亥十一月六日

氷見村

忠幸亭

代を守る恵も深き神垣や常盤の松の枝も栄へて

義堅

幾年の色も替らぬ緑して神の恵に栄ふ八重の松か枝

義尚

治れる代は久かたに御社の齋庭に栄ふ八重の松か枝

真泰

住の江や写す筆たに及はれぬ神の御前の名も高き松

重元

箱崎や遙に見えし松陰を近くもかなと急く御手洗

那綱

ふし挿む神の社の貴さをあをけは空に高き松かえ

忠幸

万代も替らぬ神の恵には清き操を見する松か枝

正明

守るてふ神の齋庭におひ栄ふ松の葉色の常盤堅盤に

忠俊

神慮幾代をかけし住吉の岸の姫松波もなれ来て

小敏

露霜におかれぬ色を御社の代々の恵を松の下かけ

同

みそなへと替らぬ色を神垣の幾重か染る松のをとえに

同

神代より今もてかへぬ色をしもふかく御垣の松は恵に

同

庭初雪

亥十一月十一日

周布村

重元亭

寒増る庭の嵐のつらさをも忘れて向ふ初雪の空

忠幸

珍しく今朝降庭の初雪は春の吉野の花は物かは

義堅

寒る夜のね覚佗しきしの、めの白きを見れば底の初雪

真泰

きのふ迄あれかし庭もおのつから夜の間に見ゆるけさの初雪

忠俊

清めせぬ庭に散敷木のはさへ間遠に見ゆるけさの初雪

那綱

炭竈のあたり床敷初雪のけふしも庭に待得てそ見る

義尚

時とてやきのふの紅葉其儘に同じ色なる庭の初雪

重元

庭もせにすたく虫の音ことふりてけふ珍しく積る初雪

秀惟

冬くれは淋しき増る庭のおもしろく成ぬるけふの初雪

忠幸

寒月

十二月十一日

北条村

義尚亭

風の音さへつらき柴の戸にすめるも寒き夜半の月影

義壁

山里はいと、嵐のはけしくて一入寒る月の影かは

重元

夕風のや、吹送る鐘の音も寒渡りぬる山端の月

義尚

冬なれや暮れはいと、寒渡る風もいとほす出る月影

真泰

忍ふ身は寒さを余所に足引の山の端出る月も恨めし

那綱

空さへて山端越る風の音もいとほぬ夜半の月影

義雄

松風の音さへ寒き夜半なれと戸さ、てや見ん庭の月影

惟秀

空寒き風につる、浮雲の眺に清き月影

同

釣簾捲て寒さいとはぬ盃のさやかに移る宵の月影

信繁

冬枯の佗しき庵の軒端にも床しく寒る夜半の月影

正明

透間ふく寒き嵐はいとへ共等閑ならぬ窓の月影

忠幸

柴の戸はつらさ床しさとりに寒き嵐も月も洩来て  
又たくひ嵐も寒る志賀の浦や氷る汀に移る月影  
忠幸

初春 壬子正月十一日 新宮 真泰亭

松竹の代々に替らぬしめ繩の長くそ祝ふ春を迎へて  
義堅

長閑成代は久方のきそ始幾重の春に逢そめてたき  
同

明ぬれは春の初の色そひて一しほふかき庭の梅か香  
義尚

初春の印と見えてきのふけふ雲は霞に立替りけり  
真泰

おしなへて春の初空なれや一入匂ふ軒の梅か、  
重元

見渡は外山の霞立なひき空も長閑に明る初春  
知義

佐保姫の織や錦の狭衣に霞いろとるけさの初春  
正明

おのつから四方に霞を敷鳴の道有御代と明る初春  
忠幸

久かたの空に霞やかましくもかしこき御代の今朝の初春  
忠俊

庭青柳 子二月十一日 北条 義尚亭

佐保姫の織や霞の唐錦みとりも深き庭の青柳  
真泰

朝日影さすかに庭も長閑成春の姿を見する青柳  
忠幸

長閑さに庭には風の音もせてやうやく靡く庭の青柳  
重元

沓音の長閑に霞む鞠の庭暮るを惜む青柳の下  
義尚

時なれや空も一つに青柳のいと長閑成庭のあけほの  
忠俊

糸遊やか、る手わさに青柳の緑に染し庭の池水  
知義

朝露の糸をひひて下りしは詠多ならぬ庭の青柳  
義安

浅緑立そふ庭の春風に染て乱る、青柳の糸  
義雄

是も又錦か庭に織はへて糸よりか、る春の青柳  
同

春雨の晴行庭の夕気色一しほ増る青柳の色  
義固

長閑成庭に風の吹からに乱そめにし青柳の糸  
正明

庭の面や寄てあく迄乗る駒のあほりの風をいとふ青柳  
義堅

軒端花 子三月十一日 周布 重元亭

声の屋に人の音せぬ軒端にもよしと賑ふ花の盛は  
朝日影長閑に移る軒端にはや、とき初る花の下紐  
真泰

山里や常のうさをは春毎の軒端に近き花に慰む  
知義

いつも降物にはあれと軒端成花にそいとふ春雨の空  
重元

とふ袖も絶て住ふる軒端にも春とて花の盛忘れず  
義尚

詠やる軒はの花の盛にそ栄ふる宿の程はしらるれ  
義安

限りなく栄ふる宿と白妙にさける軒はの花の色く  
忠幸

深山辺やまた寒かへる軒はにも春とて花の咲初にけり  
忠俊

我庵はよるへ定めぬ三吉野や軒はの花のあかぬ香そ聞  
茂真

色も香も雲井に移る軒は成花の詠はあくとしもなし  
秀世

問人のしるへとや見ん我宿の軒端に深き花の色香を  
義雄

待得ては春の軒はの友なれや花の錦はた、まくそおし  
同

香も深き花に埋める宿なれや軒端離れぬ鶯の声  
小敏

音もせてそこら降敷夜の雪は軒はの花の散にそありける  
成真

佗て住律の宿は軒端成花故にこそ人もとひくれ  
同

池上藤 子四月十一日 今井村 義安亭

□ねど池の辺の藤の花詠もあかぬ友のましはり  
義堅

紫の衣洗ふと見えけるは浪にうつろふ藤浪の色  
義尚

咲か、る池の辺の藤浪は空も一つに紫のいろ  
義安

池水に其名にしおふ紫のゆかり求めて移る藤なみ  
忠幸

紫の雲とまかひて汀なる梢の藤そ池  
忠俊

池の面庭もてりそふ紫の色爰元によする藤浪  
真泰

詠やる空も一つに紫の色香も深し池の藤波  
知義

池水の底迄白ふ色見えて松の梢にか、る藤波  
同

朝白影さやかに移る紫の所縁をしたふ池の藤波  
重考

池水に移りて咲ける藤の花一かたならぬ詠こそすれ  
実秀

静なる池の面に立波は梢の藤の移るなりけり  
年毎に花をそしつむ池の面手に結はれぬ藤浪の色  
吹ね共波立色や池の面一しほ深き紫の藤  
自から余所へも洩る、池水の底さへ深き藤波の色  
写絵もつくされなくに池の面咲藤波のかゝる詠は

沢螢

田野村

昼も見ゆる影ならはさそ花雪におとらし物を沢の螢は

五月闇沢辺にすたく螢をは草きる賤の打火かと思

五月雨の晴る間もなき沢辺にはわけてさやけし螢火の影

見渡は沢辺か、やく螢火の散かと思は又そつとへる

夕闇のあやめもわかぬ草に沢辺そしるき螢火の影

沢水にうかむ螢は五月闇くらき比こそ盛也けれ

五月雨の比はあやなし沢水の面明らかになすたく螢火

五月闇沢辺の水に影そふる天つ星かたまかふ螢火

螢火に身をもこかして思ひ川沢辺は更る夜半もいとほす

其思ひ深き沢辺に螢火の我から身をほこかしつる哉

樹上蟬

子壬 五月十一日

黄昏は空もおほつかなく蟬の高き梢に響く声く

独行旅も慰む夏山の高き梢に蟬の諸声

涼しさをなれもめつるか山陰の高き梢に蟬の声く

夕立の晴行跡の梢にはわけて涼しき蟬の声く

陰茂る木々の梢の高ければ空に聞ゆる蟬の諸声

茂りそふ木々の梢にいさきよく似たりや瀧の蟬の声く

風にあらて木々の梢の音信は心地涼しき蟬の羽衣

枝高き木々の梢の蟬の声聞も涼しき夕暮の空

垣夕顔

子 六月十一日

吉田

知義亭

成真

茂真

政忠

同

小敏

義堅亭

忠幸

真泰

知義

義安

重元

義尚

義堅

茂真

政忠

同

忠幸亭

知義

真泰

義尚

重元

義安

忠幸

忠俊

正明

時なれや賤かあしやの籬さへ色よく見ゆる夕貞の花

たそかれや置白露に色まして垣ほにかゝる夕貞の花

黄昏は賤かまかきも打しめり露に色そふ夕貞の花

賤か屋の戸ほそもわかぬ黄昏に独さやけき夕貞の花

柴の戸やさせるえにしもあら垣に心へたてぬ夕貞の花

皆人は花をそめつる其後はみを楽しむや垣の夕貞

白菊

子 九月十一日

今井

袖むれて詠るけふの幾いつこもさそ白菊の花

軒ちかき庭は千草の色ににぬる宿に白菊の花

詭人の宿とは更に白菊の花そあるしをしたふ中立

一本も折せしともる白菊のまかき吹こす風そつれなき

紅葉せし木々の梢は茂けれど菊より外にます色もなし

朝霧の深く棚引まかきにもまきれす匂ふ白きくの花

こと草はうら枯渡る秋の、に今を盛と匂ふ八重菊

森時雨

子 十月廿二日

北条

旅衣立と、まりて森の下に誰も時雨の晴間をそ待

詠やる峯は夕日の指なか三笠の森は時雨こそふれ

ぬる、をもいとほさらめや初時雨森の風のさそ紅葉、

庵近き森に風の音つれて冬きにけりと夕時雨降

空はまた曇りもあす森の下は木の葉交りの時雨社ふれ

夕日さす森の木の葉は照ながら音信渡る村時雨哉

雪中松

子 十一月二日

永見

おしなへてこと色見えぬ雪中に木高き松の影そしるけき

降積て野山それと白雪にしるきは松の操也けり

降積る夜の間の雪に常盤成松の葉色も別れさりけり

白雪のつもらさりせは中くに松の操の跡は見えまし

真泰

重元

義尚

知義

忠幸

同

義安亭

義堅

忠幸

重元

義尚

知義

同

忠俊

義尚亭

義堅

忠幸

義尚

知義

重元

忠俊

忠幸亭

義堅

忠幸

義尚

知義

朝夕に馴し軒はの松たにも積れる雪の色は珍らし  
夜と共に寒る風に降雪もさすかに積ぬ庭の松か枝  
野も山も同じ色成白雪のつもれる中に高き松か枝  
白雪の降積れ共岡の辺や風吹松は色も替らす

忍 恋

子

十一月十一日

田野

義堅亭

うしや只人めを忍ふ思川くみてほすてふ時しなけれは  
祈らんと忍ひて爰に貴船川よす<sup>三</sup>も波のかゝる思ひを  
まゝならぬ物とはしれと見初しを忘るゝ間なく<sup>二</sup>忍ふ佛  
ゆるされぬ人めの関の有に社忍ふ心の奥はふかけれ  
思ふかとははれぬ程に包め共忍ひ兼ぬる泪也けり  
まよはしと思ひなからも忍路は風の音にも心おかれて  
足引の山路をたどる心地して忍ふ思ひの限りしられす

隣家梅

子十二月十一日

吉田

知義亭

心あらは匂ひもらせよ梅の花よし中垣の隔あり共  
是も又ならふ隣の情とてうへぬ宿にも送る梅か香  
風吹は匂ひます也隣なる百枝の梅の花咲る比  
香にめて、立<sup>二</sup>そつくせ中垣よ隣の梅の匂ひ隔つな  
我宿に梅の匂ひは満にけり花と隣に見る斗かは  
吹送る風の便に隣成梅の匂ひそ爰にもり来る  
軒並ふ宿の中垣吹や越花を隣の梅の下かせ

はかり見んあなたの主の色も猶隔す通小垣の梅か香  
人ならば浮名や立ん中垣を越てこなたに通ふ梅か、

若 菜

癸丑

正月十一日

吉田

知義亭

寒かへる風もいとはす初春のよきためしにも若菜をそ摘  
名にも似すけふこそはつめ初春やあしたの原の若な、れ共  
あら玉の春の野面瀬に誘ひて行来も繁く若な摘<sup>てん</sup>

忠俊

忠幸

老の身も年立帰る唐衣うら珍しく若なつむ也  
淡雪の晴間もまたす春日野に袖打むれて若な摘也  
春毎に若なつむ也芹川のかはらぬ例幾代へぬらん  
春毎の例かはらす春日野や数も限らす若なをそ摘  
林間花  
丑三月十一日

今井

三月十一日

義安亭

立並ふ木々の梢は緑にてすきまに洩る花そ床しき  
春なれや生統ぬる常盤木の中成花も時を忘れす  
見渡はみとりも深く生続く木の間に咲る花の色<sup>二</sup>  
誰人の住る庵そうしろ成林の中に花をましへて  
春くれて林の色もみとり成中に紛ぬ花の夕はへ  
詠やる園の林の木の間にも咲そふ花の色はかくれす  
誰とてもとはぬ林の木のみより顯れ見ゆる花の色かを  
消残る雪かと更にみ山への林の中にさける桜は  
比と今林の木々も緑成中に床しき花の夕はへ  
色深き松の林の緑にもそまぬ木のまの花の夕はへ  
其梢しけき林のひまもりて咲そふ花の色そこ

岸款冬

丑卯月十一日

忠幸亭

川水に色を移せは山吹の花もさながら岸に寄浪  
川岸に今を盛と咲色はよし足引の山吹の花  
隔れとわりなき中や吉野川名社流て岸の山吹  
<sup>三</sup>の<sup>二</sup>の色も盛の花なれやいふにいはいはれぬ岸の山吹  
咲色も一入深し川岸の波にゆるるゝ山吹の花  
草も木も緑の中に其色を尋て爰に岸の山吹  
影移る色は一入水底に深くそ見ゆる岸の山吹  
誰とても尋て爰に岸成花の色香も深き山吹

郭 公

丑五月十一日

重元亭

待人はあまた有とも郭公我宿にまつ百千返鳴ヶ

義堅

五月闇あやめも見えぬ子規声斗社しるへ也けれ

真泰

今更に夢かと斗子規ね覚の床におとつる、かな

義尚

五月闇空もおほつか鳴声に心つくしぬ山郭公

知義

余所よりも初音や早き子規花橋の匂ふあたりは

重元

また深く思へとてやは郭公ほのかに過る夜半の忍音

義雄

と斗のそらねをも哉子規はからる、共嬉しからまし

同

聞馴て後を思へは郭公初音を待し程は物かは

忠幸

五月闇何をしるへにほと、きすいつこともなく声斗して

忠俊

飛渡る影は見えねと子規鳴声いつこ夕暮の空

政忠

夕立

丑 七月十一日

義堅亭

時の間に晴たる空をいかなれはかくきはかすとすさふ夕立

義堅

分て猶暑さを侘る旅衣ひとへに涼し夕立の空

義尚

淡路鳴通ふ小船も時のまに雲隠行須磨の夕立

重元

ぬる、共よしいとはめや涼風に先立て来る夕立の雨

知義

漕船もしはしは爰に漆川嵐はけしき夕立の空

同

降と見し其山の端を吹越て風に先立夕立の雲

義雄

雲間より横に日影は指なから空はしきりにすさふ夕立

忠幸

山の端に雲か、るかとする内に早打そ、く夕立の空

忠俊

曇るか見れば晴れ行く足引の山のは越る夕立の雨

政忠

名にも似す影社見えね鏡山曇りも深き夕立の空

真泰

浦月

丑 八月五日

壬生川

義雄亭

須磨の浦汐諸共に指出る影もさやけき秋のよの月

義尚

浦風も身に入渡る海つらや限りもしらぬ月の詠は

知義

浦伝ふ波のうねく影見えて水底清き秋のよの月

重元

藻塩焼浦の海士さへ長夜を侘てやすめる有明の月

義雄

浪の色はよる共見えす須磨の浦風も静に澄る月影

忠俊

明石てふ名をもたたらす浦浪のよるとは見えぬ有明の月

忠幸

浦風や波のよるくみか、れて汀はことに清き月影

同

暮山鹿

丑 九月十七日

北条

尚亭

深山辺や淋しき増る夕暮にいつこ共なく鹿の声く

知義

暮て行道は寂しき足引の山のあなたに鳴鹿の声

重元

いと、さへ秋は物うき山本に聞も男鹿の夕暮の声

義雄

山里はさらても淋し夕暮のあやなく鹿の声を物うき

義尚

さびしさはたとふる物もなく鹿の声かすか成山本の暮

忠幸

山里はいと、淋しき夕暮にさてもおほつか鳴鹿の暮

同

夜霞

丑 十一月十一日

新宮

真泰亭

寒る夜は枕はさえて賤か屋にそれかとむ霞ふる音

義尚

賤かやはいと、侘しき冬のよの寒きをいかに霞ふる音

知義

寒る夜をいとひ明しつ降積る古屋の霞の音さへもなく

義雄

小夜更て霞たはしる音きけはいと、ね覚の床を侘しき

真泰

寒る夜は賤か笹屋の殊更に心くたけてふるあられ哉

重元

冬の夜はいと、寒さを板に音もはけしく降霞哉

義安

小夜更るま、に寒さや増るらん嵐につれて霞ふる音

忠幸

かき曇りあやめも見えぬ冬の夜は音に杜しれ霞ふるとは

忠俊

音にのみ聞そ侘しき夜の宿あたら霞を見る由もなく

正明

庭の面かのこまたらに終夜積る霞を見ぬそ侘しき

重久

かき曇りふるや今宵の霞たに見るよしもなく明さんもうし

人

初春梅

甲寅 正月十一日

壬生川

義雄亭

空はまた寒帰れ共初春のけしきは梅の花に杜しれ

真泰

春くれば空も霞の色そひて一入深き園の梅か香

義尚

また盛ならて匂ひは一入にはな珍しき初春の梅

重元



初春や空の光ともろ共にさそ増らん梅の色かは  
治れる御代のためしを初春の色香に見する里の梅枝

初春の梢に咲る梅の花ふかき色香は何にたくへん  
久方の空も長閑き初春の梅の色香にしく物はなし

色も香もおのつから也初春のけしきは梅の花にそ有ける  
天満宮の社司の本にて初春梅といふ題にて人々哥よみ侍りける時

当宮の御神徳を仰き奉りて またなき心をかけまくもかしこま  
りて

天満□神の光に初春の色香もふかしみつかきの梅  
あなかしこ

秋来れは渡るものとはしりながら猶恨めしき帰る雁かね  
いかなれは帰るとりく多き中にわけて名高き天つ雁かね

春されは四方の気色も長閑成空を急きて帰る雁かね  
跡先に友よひつれて帰るさの名残や惜む天つ雁かね

新しき春てふ空をいかなれは古里へとて帰る雁かね  
今更に名残を惜き帰る雁声は雲井に霞む明ほの

いか斗嬉しからまし古里へ帰らんと思ふ雁の心は  
いかなれは花をはよそにこち風を<sup>受</sup>て越路に帰る雁かね

古里を忍ふ心の先立て花をは跡に帰る雁かね  
来る春の時や遅しと待侘て思ふ越路に帰る雁かね

故郷にいか成契り有明のつれなく見えて帰るかりかね  
寄花恋

人目のみ忍ふの山の桜花ひらけん程を待そ物うき  
契り置いて人の心の花の色うつらふ時のなきよしも<sup>かな</sup>

花の色におとらぬ君か情には身を忘れてもあはむとそ思ふ  
正明

送りにし文に心をおく山の峯をへたてし花の俤  
難面も終になひかん梢なる花に思ひの数つもりなは

花を見る心ならな濁江や底の思ひの晴間やはある  
恋く<sup>く</sup>て哀れいつかは逢坂のせきちの花をともしに詠めん

恋すてふ人の心の花の色うつらふ後そ物うかりける  
神社卯花

さなからに白<sup>ゆ</sup>ふにこそ御社のほとりに咲る卯花の色  
里わかぬ色とは更に御社の木の間にさへや咲る卯花

夕暮はいと、おほつかなく声もいつこ成らん山時鳥  
郭公心してなけ夕暮は待てふ時となれもしらすや

目に近き森の梢も晴やらぬ雲に隔つる五月雨の比  
見馴つる山の端いつこいつみ成しのたの森の五月雨の<sup>比</sup>

人ならはあた名や立ん玉たれのひま求めつ、通ふ夕風  
かくとたに告しらせはや我思ひうはの空成風の便りに

夕郭公 以下廿九首乙卯五月十六日北条会之作  
同月廿五日從壬生川題来

人ならはいさとも更に時鳥あたにやすきぬ夕暮の空  
なのらすはいかてしるへき時鳥まつにかいあれ夕暮の比

夕暮の覚束なくもしのひねはわれのみきかせ山時鳥  
時鳥めにはさやかに見えね共いつくともなく夕闇の声

闇分てゆくやかかへるや時鳥なくはいつこと夕暮の空  
橘の匂ふ軒端は郭公声もまぢかき夕暮の空

重元亭 忠幸 忠俊 正明

知義 義雄 正明 忠幸 忠俊 忠幸上

新宮 真泰亭 忠幸 同 義堅 真泰 知義

重元 義安 正明 同 重元 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同

夕へこし八重の葎にほの見えて声あらはる、時鳥哉一色弥兵衛  
障なく夕は爰にしたり来て明行空に時鳥なく  
雲くらく鳴すて、行郭公ゆふへの空にのこる一声

同 詮重  
無名

森五月雨

降積る杜の木の間のそれそともわかつてやけふも五月雨の空  
けふとても森の下雫ふちともならん五月雨の比

同 義雄  
重元

降くらす日数もしらす神南備の森も一入五月雨の比

同 知義  
小敏

日数へてふる五月雨にま染ぬ下葉や朽ん衣手の杜

同 詮重  
無名

茂りそふ杜の下かけかきくもりもとりもつすき五月雨の比

同 詮重  
無名

けふ幾日森の木の間にきりおほひはれるひまなく五月雨の比

同 詮重  
無名

まさきなくつ、める森にたつきりは降くらすらん五月雨比

同 詮重  
無名

かきくらしいく日程ふる五月雨の葉すへ波よる森の下草

同 詮重  
無名

森かけに住身はいと、淋しきに打続たるさみたれの比

同 詮重  
無名

吹送る風の便もうきことの身にしむま、の恋そ苦しき

同 義雄  
重元

立添てくすのうら風忍ふにもあまりて恋の身にそそめてき

同 詮重  
無名

只ならぬうらやましくも待宵の風に手をおふねやのとほし火

同 詮重  
無名

せめて只空吹風の便にもなひくときかんことのはもかな

同 詮重  
無名

しらせはや、心なきさのあしのはも浦吹風になひくならひを

同 詮重  
無名

恋渡る身のならひにやうき心うのは空成風に任せて

瞿麦

以下六首乙卯五月十二日從壬生川題來  
同廿七日調遣ス

亥十一月十九日  
三萬老へ  
短尺遣

にくからぬ名なれはとて昔よりその名にしおふ撫子の花 忠幸  
聞及ふからくれなるの色を今爰に見せたるやまとなてしこ 同

沢螢

夕されは沢辺の螢なれも又もゆる思ひのやるかたやなき 同

水の面に移る光をしたひてや沢辺をさしてゆく螢哉 同

寄松祝

君か代の栄へ久しき例にはたえず子日の松をこそひけ 同

へ宮柱下つ岩根に敷立てうこかぬ御代に住谷の松 同

名所月

浦風は浪路はるかに吹晴てそらすみ吉の月そさやけき 同

比は秋月は清見か関なれや風に波こそよると見えけれ 同

亥十一月廿日  
京三短尺遣

〔詩歌雜稿〕 〈抄〉

きよめせぬ賤か垣根も清らかに咲乱れぬる夕顔の花

乙酉仲冬十四日

妙昌信女三回忌哀詞

人間変化最堪悲 寒暑三回猶即時 香火焼添更泣哭 熟觀往事披眉遲  
廻りくる月日はかりをかたみにてむかしかりと成そ悲しき

丙戌十一月廿七日壬生川悼矢野早世遣于令第渡辺氏而述真情極月遣ス  
幻夢浮世最堪恨 乱雁催憂聞計時 有見生前容貌健 惜夫天性覚知奇  
とやかくといとままむわさも化し野の印の数に君をなしつる

高橋宗見雅丈一日顛倒の足立も直らす古人と成給ふ 誠ニ浮世の変玄又あ  
るましき事なからあまり成大變更に誠とも思はれず 至哀に文なしとは  
先達の格言也 まして我等ときはそれまでもあらず かたはらいた

き事なれ共尊靈の好物なれば寸志を述て大唐大和の哥のやう成詞を手向  
奉りぬ

春月頻霞聞計時 年来懇意入愁眉 熟思容貌不離眼 殊惜平生立志奇  
無人の影は心にかひ出て忘れかたみはこし方のこと

なに事もなきはならひの霞哉

己酉三月十八日七々日遺々

奉

新宮大明神広前 詠寄社頭和歌

正六位紀朝臣忠幸

国をまもるめくみあらたのみやはしらたてそめしよりいく代へぬらむ

元文四乙<sup>末</sup>五月廿一日吉祥寺閑居住持<sup>ヲ</sup>祝

謹て 老比丘の閑居し給ふを祝し奉るとて

紀忠幸上

いさをしのなりて浮世を遁てし人の心の奥そゆかしき

たのしみを極むといふは老の後世をのかれたる人にそ有ける

恭祝 忍貴師為吉祥寺主

従来性徳海無量 今応師教主吉祥 緇素連袂伸慶賀 永伝密法万春昌

密教山主と成給ふ心を

ひそか成教てふ名の山道をまよはて登り得たるかしこさ

蘇 安山公賀<sup>不<sub>レ</sub>用</sup> 退休見恵詩歌其芳韻

指月<sup>拜</sup>

自羞饒舌耕詩量 歌道根元宜吉祥 寸目仰高唐嶺頂 由来曷幾万愚昌

馴来つる浮世を廻る法車老を扶けて暁をまつ

〔柿本明神奉納詠〕

通題

納 涼 風

神のますもりの木陰はあつさをもしらくゆふなひく風のすゝしさ 周円

石岡八幡宮の和歌資料

またきより秋もかよひて夕露のすゝしくおつるもりの下風 見阿  
塩風もこゝにかよひてなつころもうらとをからぬもりのすゝしさ 貞閻  
しけりあふ木の間の風のすゝしさに夏をよそなるもりの下陰 通文  
夕風にこゝろのちりもはらふまてすゝしさあかぬもりの神垣 在真

安永三年六月十八日納涼会当座

石岡八幡宮社中

柿本明神法楽詠五十首

題者延享元年甲子八月十八日

石見国高角社御奉納 桜町院勅題也

山早春

言のはのみちの光もあら玉の

宥 宝

海上霞

のとけさはたくひも浪の幾千里

見 明

松 鶯

春風の吹ものどけき松かえに

自 然

梅 風

香にほひ梅さく比の春風に

尚 正

故郷柳

はな見ぬ里のさかりしらるゝ

貞 閻

夜帰雁

こしの海やかすめる浪のよるも猶

惟 義

峯春月

更行はわきてあはれも在明の

貞 中

尋 花

にほひくる風をしるへに山ふかく

通 辰

見花 信寄

うきわさも春はわすれて年毎の花にこゝろをつくしてそ見る

落花 光利

吹風のさそへはあたにやまさくらふもとの雪とふりつもりぬる

岸藤 久次

水底にこきむらさきのいろ見えてさきこそか、れきしの藤なみ

春山田 周円

またさちる花の浪をもせき入ていそく山田の賤かなはしろ

新樹 日誠

をく露の光もそひて玉かしはのきはす、しくしける此ころ

聞時鳥 惟政

岡の名の橘かほる木のもとをすきかてになく山ほと、きす

早苗 政義

うへわたす小田の若苗吹風になひくみとりも見えてす、しき

夏月 真清

夏の夜の月にもあきのおもかけをそらにや見せてすめるす、しき

夏艸 常房

此<sup>こゝろ</sup>はひとつみとりにしけりあひて花<sup>も</sup>なつ野の尾花萩かえ

夕立雲 演政

見るうちに遠の高根は雲はれてゆふたちきほふ里のひとむら

納涼 忠

夏衣たちよる袖に露ちりてす、しきしむる森の下風

艸花 在真

咲ましる千種か中に色わきて見るもはへある秋萩の花

野外虫 忠尚

うらみてやむしの鳴らん秋ふかくなるみの野への露の夜さむを

岡鹿 里遠

秋萩の花も盛になりぬらし野すゑの岡に小鹿なく也

浦秋夕 久次

さひしさはたくひも浪に音添てうら風わたる秋のゆふくれ

月出山 存道

山風に雲はあとなく吹はれてさやかに出るあきの夜の月

橋月 信寄

岩浪のをとさへ更て秋の夜の月すみわたる宇治の川橋

関月 忠成

諸人のこえやすき代に月ならて何かもるらんふはの関山

擣衣 在真

聞もうし秋のあはれもふかき夜のさむさに賤か衣うつこゑ

秋時雨 周円

さらても秋は袂の露けきにいかてしくる、ゆふ辺なるらん

賤菊匂 雅直

咲のこる花にも露をかけとめてにほひそふかきませの白菊

紅葉 見明

うすくこく時雨にそむる紅葉はのいつもはへあるあきのやまのは

暮秋 貞中

いつしかと外山しくれて行秋をなれも小男の音にやなくらん

朝木枯 宥宝

露霜はそめぬ軒はの椎紫もけさふきしほる庭の木からし

寒芦 真清

霜にかれ雪におれふす芦のはのこほる入江にのこるさむけさ

河千鳥 日誠

なかれ洲に霜もこほりて更る夜の河辺をさむみ千鳥なく也

初雪 時雨にはつれなき松もうつもれて  
 けさはひとつにみねの初雪  
 深雪 けぬるうへに又ふりそひて白雪の  
 ふかくつもりの浦のまさこち  
 鷹狩 かりくらすほとはさむさに白雪の  
 つもれる野へを分るかり人  
 炭竈 山賤の世わたるわさのいとなきも  
 けふりにしるき峯の炭竈  
 忍久恋 涙こそ袖にはせかめ年月の  
 つもるおもひをいかにつゝまん  
 待恋 さりとしもおもひかへして待ふかす  
 心や何をしるへなるらむ  
 別恋 名残なをしたふ別に音をへて  
 あかつきいそく鳥かねはうし  
 顕恋 せきあまる袖の涙やなけれけん  
 さても今はうき名とり川  
 恨恋 あまの子にあらぬわか身のいかなれは  
 うらみてのみや年の経ぬらん  
 旧恋 いかにかく身にはそふらん年経ても  
 逢見ぬ中の人のおもかけ  
 松積年 年経ても色はかはらし幾千世の  
 みとりもわかぬの浦の松かえ  
 巖苔 うきなき山の巖の苔ころも  
 たゝみかさねて幾代ふりけん  
 鶴立洲 幾千年鶴もすむらしあかしかた  
 すさきにたてる松を友にて

政義 惟義 惟政 雅直 演政 貞閭 存道 忠 自然 通辰 忠尚 光利 貞中

名所市 はりまたた行かふ人のたえやらて  
 しかまの市のたゝぬ日もなし  
 神垣のけふの手向に言のはの  
 道のめくみをあふく諸人  
 祝言 言のは道のさかへを神かきに  
 見せて生そふ千代の松かえ  
 述懐 尚正 周円 忠成  
 立春 梓弓やちよをかけてたつ春の  
 ひかりのとかに霞む神垣  
 朝霞 朝日影出るひかりもほのくと  
 のとかにかすむ春の山のは  
 ふるとしの雪にとちたる谷の戸も  
 あけてはるめく鶯のこゑ  
 谷鶯 萩生守屋又兵衛  
 残雪 山姫の霞の衣うすくして  
 のこるすそ野の雪のさむけき  
 長閑なる日影まちえて雪きへの  
 若葉 丹原野口万作  
 里梅 さそひくるにはほひもふかし名にしおふ当所林昌寺上人  
 梅津の里の花のはる風  
 咲梅のさかりの比はえたかはす  
 こと木にもほふ軒の春風  
 春月 壬生川垂水寛右衛門  
 ならひにかすむ空の月影  
 信友

詠百首和歌

春曙	帰雁	春雨	岸柳	待花	初花	見花	花盛	落花	山吹	池藤	暮春	更衣			
花鳥のいろ音もふかく立こめて かすむ野山の春のあけほの 散ころのうさにあはしと春のかり さかりの花にわかれゆくらむ ふるとしもわかぬ斗にうちしめる 霞の衣はるさめのそら 水にうつる影もなひきて川風に むかふきしねの青柳の糸 此ころは春のやま辺に旅ねして まつさくはなを待そわひぬる 朝日さすかけもにほひてほのかにも あくる外山の峯の初花 山鳥の尾上の花のさきしより なか／＼し日をあかすこそ見れ 長閑しな今をさかりと野も山も にほひみちぬる花の春風 おしむにも猶あまりあり春風に さそはれてちる花の色香は 行春のひとへにおしきこ、ろをも いはてや見する八重の山吹 風わたる池のみきはのまつかえに なひきてか、る藤浪の花 しはしたにうつる日数はと、まらて くれゆくけふの春おしそおもふ 色も香も夏のころもにかへぬれば こ、ろそのこる花そめの袖	北条黒河石平太 京都森河主計 北条神護寺 吉田日野重吉 壬生川西川善右衛門 小松町渡部友右衛門 川之江吉祥院法印 当所高橋伝三郎妻 明利川一色新三良 朝倉渡部新藏 萩生飯尾治右衛門 小松御家中飯塚順安 今治御家中江嶋助之進	通久 周尹 湛空 政義 孟雅 忠 宥寿 以久女 重通 敬武 忠賢 尊道 為親	卯花	待郭公	聞郭公	郭公稀	古郷橋	早苗	五月雨	鶉川	夏草	夏螢	夏月	夕立	杜蟬
てる月の影かと見えてさきつ、く しつかかきほのよるのうの花 幾夜半か更てやなくとねもやらす まつにかひなき山ほと、きす いつちとかさしてをまたんほと、きす あやなきやみの夜半の一声 ふるされん世をうしとてやしのひ音に川之江脇忠治 また立かへる山ほと、きす むかしをも猶しのはれてふるさとの ふりし軒はににほふたちはな 時そとやうたひつれつ、乙女子か とり／＼いそく小田の若苗 けふ幾日ふる屋の軒端くつるまで はれぬ五月のあま雲の空 篝火の影なかりせはうかひふね ふかきよかはやさしまとふらん 生しける夏野の草の中にしも はへある花やさゆりなてしこ 草むらの露のかす／＼あらはれて ほたるとひかふ影そす、しき 見るほともなつのよな／＼月かけを 空にのこしてあくるしの、め 時の間に日影くもりてふく風に す、しくきほふ夕立の雲 あつき日もかけらふもりのくれかけて上冷泉家御内松永康之進 をやまぬせみの声そしくる、	壬生川竹田藤兵衛 萩生森河伝兵衛 今治御家中多羅尾弾藏 丹原稻井助治 小松清楽寺 当所佐伯見琳 壬生川矢野此右衛門妻 多喜浜飯尾兵野右衛門 壬生川秋山長五郎 萩生真鍋正三	時久 輝定 光品 復所 忠尚 久林 真応 方教 喜美女 綿雅 住矩 忠誼 久雄													

夏 祓 早 秋 七 夕 萩 風 萩 露 女 郎 花 夕 虫 夜 鹿 初 鴈 秋 夕 山 月 野 月 川 月

年波もなかなかれてみそきする  
 ゆふくれす、し加茂の川つら  
 今朝ははやまかき吹こす秋風に  
 きりのひとはやりはしむらん  
 織女のちきりはいく夜かさねても  
 あふはまとをのあまの羽衣  
 初秋に聞す、しさもこのころは  
 なれてものうき萩のうは風  
 はへあれやはなにひかりを置そへて  
 みかきか原の露の玉萩  
 さためなき風になひきてをみなへし  
 花のこ、ろもうしろめたしや  
 露しけき草はの床にゆふ月の  
 かけまつむしの音をや鳴らん  
 山田もるしつかかりほのいねかてに  
 き、わひぬらし小男鹿の声  
 更わたる月のよさむにそへてきく  
 こゑも身にしむ秋の初雁  
 聞なる、軒はのまつのあらしさへ  
 こ、ろとわひし秋の夕暮  
 雲霧はあらしにはれていやたかき  
 いよのたかねの月のさやけさ  
 分てゆく夜半もあかすよむさしの、  
 つゆにはてなくやとる月影  
 すみわたる月のひかりに川みつの  
 その玉藻も見えてさやけき

小松御家中矢野源左衛門  
 就 賢  
 桑村郡実報寺法印  
 宥 宝  
 当所高橋兵作妻  
 しつ女  
 朝倉武田惣左衛門  
 宜 寄  
 萩生飯尾治右衛門妻  
 見代女  
 京都伴氏  
 蒿 雞 欲  
 朝倉光藏寺  
 叫 阿  
 壬生川矢野此右衛門  
 政 則  
 丹原守口益庵  
 貞 誠  
 池田神野平治  
 通 見  
 小松三嶋宮神主日野殿司  
 真 亮  
 高知八幡宮神主宮原出羽  
 直 昌  
 朝倉無量寺  
 宥 寛

江 月 浦 月 筈 菊 擣 衣 曉 霧 岡 江 葉 庭 江 葉 九 月 尽 初 冬 時 雨 落 葉 朝 霜 寒 草

更る夜の松のあらしにきりはれて  
 ひかりくまなき住の江の月  
 浦風に浪のうききりふきはれて  
 見るめさやかにすめる月かけ  
 盛には野へのちくさも及はしな  
 まかきのきくの花のいろく  
 誰里もおなし夜さむにたへかねて  
 あきのさころも打しきるらん  
 秋山のふもとをめぐりたちこめて  
 またのこる夜のふかき川きり  
 此ころの下草かけてつゆしもの  
 をかへのもみち色そ、ひゆく  
 見そあかぬ夕日の影のうつろひて  
 猶てりまさる庭の紅葉は  
 けふのみのあきのなこりとなかむれば  
 磯神社神主越後守従五位下  
 いと、身にしむ夕くれの空  
 はつせやまひはらの嵐をとさえて  
 あけゆくかねに冬や告らん  
 いこまやま雲もあしとく峯こえて  
 ふもとの里にしくれふる也  
 庭の面の梢をしほる木からしに  
 おちはみたる、音そはけしき  
 ひましろきまきの板屋の朝霜を  
 残れる月の影かとそ見る  
 さま／＼の花もいつしかふゆかれて  
 秋のいろなき霜の下草

多喜浜神野忠治  
 芒 明  
 当所覚法寺  
 成 覚  
 丹原北大路助軒  
 盛 信  
 朝倉正善寺  
 宥 応  
 壬生川飯尾弥一右衛門妻  
 市 女  
 禁中御与力京都坂本文藏  
 賓 興  
 国安本妙寺  
 日 誠  
 秀 起  
 小松御家中黒田良水  
 勝 之  
 今治御家中完甘彈治  
 光 道  
 小松御家中神野右学  
 義 方  
 宇馬郡半田矢野彦惣  
 美 矩  
 当所高橋武八  
 重 遠

千鳥 難波かた湯もさためす夕しほの  
みつのうらはに千鳥鳴なり  
丹原安藤弥兵衛 好之

水鳥 池水のこほりの床をしかかの  
むれるてさむき夜をや佗らん  
当所高橋弁治 興政

水初結 さへくし夜半のあらしに今朝ははや壬生川飯尾兵藏妻  
こほりそめぬる庭の池水  
小松本善寺 元女

冬月 嶺たかみ雪をてらしてうき雲の  
たへ間に見ゆる月そさむけき  
京都大井幸左衛門 法阿

鷹狩 はし鷹のつはさをしはし休つ、  
いくよもとなくあかすかり人  
当所高橋安之丞 信秀

野霰 冬かれの尾花か袖もうちなひき  
あられみたる、野へのさむけき  
北条黒河右平太妻 義質

浅雪 ちりつもる木のはの色もなを見へて  
ひとへにうすき庭の初雪  
田野野口瀧治 た美女

積雪 やはた山いく千代かけて松かえに  
ふりつもるらん雪のしらゆふ  
綾延八幡宮神主豊田織之助 惠適

閑中雪 いやふかくつもれる雪にみちたえて  
人もとひこぬ宿のしつけき  
小松御家中高野瀬焉 義辰

歳暮 河水はこほりとつれと年なみの  
はやきなかれはよとむ瀬もなし  
土居加地助 光利

寄月恋 くもるや月のなさけ成らん  
あふ事はあらしにまよふうき雲の  
当所高橋与市左衛門妻 盛黄

寄雲恋 そらにのみたつ名をいか、せん  
ちきりをく言のは草もかれはて、  
宇馬郡三嶋宮神主宮崎長門守 登免女

寄露恋 露のなさけも今はあたる  
貞住

寄雨恋 ふる雨をかことになしてこぬ人を  
まつにかひなく更る夜そつき  
小松町三宅川嘉平太 常重

寄風恋 つれもなき人のこゝろのあき風に  
うらみそたへぬ野への真葛葉  
当所伊藤弁六 祐浮

寄山恋 人よしのはらはぬねやはちりひちの  
やまとしたかくつもるうらみを  
丹原野口太五良 公貞

寄関恋 いつこへんあふ坂山そつれなさの  
心のせきを人はゆるさて  
京都竹内松月 光昌

寄海恋 恋わたる身をよるへなき捨小舟  
ちひろの海のふかきうらみに  
当所高橋次右衛門 政方

寄原恋 露の身のきえはてよとやあたち原  
あさくとのみや人はおもはん  
当所高橋伝三良 演政

寄橋恋 末つみにかけはなれなはいか、せむ  
ちきりそめつるまゝのつきはし  
北条稻生政之丞 政之

寄木恋 柚川にしつむもうしやなかれ木の  
よるかたもなく年をへぬれは  
壬生川一色又三 範武

寄草恋 すゑかけし露のちきりもあたなれや  
いろかはりゆく秋の草葉に  
周敷神社神主伊佐芹齋 重辰

寄鳥恋 なみた川かきてなかる、水とりの  
音をのみなくと人につけはや  
今治御家中水谷権兵衛 和茂

寄虫恋 幾ゆふ辺たのみかけてもうき人の  
くる事かたきさ、かにの糸  
当所三宅川忠藏 常房

寄獸恋 見せはやなひとりふするの床の上に  
かたく袖の露のみたれを  
今治御家中岡田園右衛門 信家

寄玉恋 なき玉をたつねし人もあるものを  
たのめし事になとわするらん  
京都馬杉氏九十翁 亨安



寄鏡恋

ともに見しむかしを思ふ涙より  
むかふか、みの影そくもれる

国安越智辻之助  
通辰

寄枕恋

又もあふ事はかたみのこまくらに  
つもれるちりをいつかはらはん

当所高橋泰藏  
惟政

寄衣恋

うらみしもむかしになして恋衣  
きつ、なれぬる中のわりなさ

宇馬郡三嶋前谷祐治  
時保

寄原恋

むすひをくかひこそなけれかた原の  
あはてとしふる中のちきりは

吉田佐伯金吾  
定長

浦松

年経てもおなしみとりにさかへつ、  
なさへ老せぬ□の浦松

今治光林寺法印  
宥順

窓竹

吹となき風にそよきて深き夜の  
さらにしつけき窓のくれ竹

京都小沢帯刀  
玄仲

山家風

吹たゆむひまこそなけれ山かけの  
まつの戸ほそをた、くあらしは

当所岡見瑞  
雅直

田家

夕気たくそともの小田のうすけふり  
見るもさひしき賤かかりいほ

小松御家中飯塚順安妻  
るい女

故郷

さひしきはまさきのかつらくる人も  
あられて月日をふるきこの庭

桜井芥川兵作  
茂則

海路

吹をくる風にまかせてはる／＼と  
ちさとの浪をわくる船人

小松宝寿寺  
見阿

羈旅

古郷にことつてやらんたよりさへ  
とをさかりゆくひなの長路

円海寺梅柳軒  
周円

述懐

山の井のみつうらあさきこ、ろとて  
まなふかひなき我身をそおもふ

今治矢野丹作  
尚正

神祇

まもりますみかけもきよき石清水  
ふかき恵をあふかさらめや

洛新玉津嶋社神主森河巨  
高尹

祝言 うれしとや神もめつらんもろ人の 願主

追加 寄道祝

忠成

あふくそよやまと言葉の道ひろく代々につたへてしけきさかへを  
和歌のうらのまつふく風もしつかにておさまれる代の言のはのみち  
幾よろつ代々にさかへんしきしまのみちに生そふやまと言の葉  
言の葉もわきてさかへん玉ほこのみちあきらけき御代のためしに  
治れる御代のためしや敷しまのみちにしける大和ことの葉  
行めくる月日の道をためしにてつきせぬ御代をいはふ諸人  
分るともつきぬ言はのみちはなをいく代久しくさかへゆくらむ  
幾千々の代々をかかねて敷鳴のみちのさかへのつきぬかしこさ  
長閑にも霞を分てしきしまのみちにそあふく春の神かき  
玉鉾の道はたえせしあまてらすかみの光をはしめとはして

源氏歌集

源氏歌集〔略〕

新玉津嶋奉納和歌二十首

関路霞

雲霧もとつるをいかて東路の関にかすみの名をと、めけん

柳掃水

春風に岸根をはらふ青柳のいとにみたる、水の白玉

夜春雨

常尊寺閑居 珠峯

多羅尾 光品

小寺 信安

終夜身のふることも思ひ出て猶袖ぬらす春雨の空

遠村花 松本 忠真

誰としも宿はしらねと行て見ん遠山もとの花のさかりを

春日遅 国分 龍岳

心からいとひ入ぬる山すみあまりしつけき春の日長さ

朝早苗 町田 武朝

あせつ、きうへし田面にをくれしと早苗とりくけさいそくらし

市郭公 備前屋 正殊

さはきたつ市の中にも郭公き、うる人に初音もらしつ

垣夕顔 多部 つま女

露結ふ賤か垣根のおく見えてさけるも涼し花の夕良

萩移袖 多部 綱久

あかす猶秋の、遠く分行は袖に色そふ萩か花すり

風前鹿 常尊寺 八重女

まはさちるみやきの野辺の秋風に鹿の音そはぬ夕暮そなき

霧間鷹 常尊寺 牖武

立こめてそこともわかぬ山のはのきりよりもる、初雁の声

橋辺月 常尊寺 もよ女

宇治橋や行来もたえて更る夜に月影のみそすみ渡りける

菊満庭 常尊寺 さつ女

秋毎にいやうへそへて匂ひさへ籬にみつるきくのいろく

暁落葉 田頭 崇延

風さそふ夢はあとなき手枕に木のはちり来る窓の明ほの

鳴千鳥 梶 清商

置霜のつはさやさむみ河嶋に行めくりして千鳥なくなり

社頭雪 村井 吉隆

今朝は又あけの玉垣色かへてつもる神の雪のしらゆふ

初逢恋 江鳴 為正

年月の恨みもとけて今宵こそむすひそめぬれ中の下紐

立名恋 木村 正俊

かく浅き契りもしらてあた波のかけて悔しきうき名取川

漁舟火 中沢 忠雄

暮行はあまの小舟も漕つれて見るめ数そふ浦のいさり火

寄神祝 完甘 光似

代々ふとも恵みみやこにうつります光くもらし玉つしま姫

寛保二年壬戌 星夕言志七首 光似

空に星ももらさてうけよ七種の花の外なる言の葉草も

いか斗深きえにしそあまの川あふ瀬たえせぬ星のちきりは

雲の波も立なきかりそ天の川逢ふ瀬まれなる秋の一夜に

人ことの願ひの糸の筋くは空にうけひく星やしるらん

今宵こそ晴てあふらめへたてこし思ひの雲も星のうらみも

雲霧のさはりもあらて七夕のけふわたすせや八洲の川舟

かきらしな契り初つる神の代も幾年かへす星合の秋

小松御連衆点取 点者不知

秋夕傷心

へ秋は猶心もほそき紫の戸にをくかたせはき袖の夕露 延寿院

へかれくりに千くさの花も虫のねも心をいたむ秋の暮哉 長松院

へ秋ふけて稲葉の露も虫のねもくたけて物を思ふ夕暮 提宗

へさらてたに秋の夕は寂しきにあはれ催すいり逢のかね 如風

へいかにせん思ひすつれとなへて世に秋の夕そあはれいやます 錠女

〱露時雨ふりにし秋の夕されは心も身を思ひもそてにしほりて  
〱秋はた、雲のはたてに物思ふこゝろくるしき夕くれの空  
〱鹿の音も萩吹風も数ならぬた、夕暮の秋そ身にしむ

晚月厭雲

〱宵よりもくもらはつらしね覺して月にともなへ有明かたの空  
〱入かたの月の影さへほの見えてしはしはいとふ暁の雲  
〱今しはし雲なへたてそ暁のおもかけうとき山の端の月  
〱まてしはし詠る程も有明の月のかつらにかよふ浮雲  
〱吹結吹結ふ雲井行末の風も心あれな月に名残は有明のころ  
〱明る間もさして程なき月影にはらはて雲のもしやか、らん  
〱まてしはし雲なか、りそ有明の月にほとなき西の山のは  
〱入かたの名残そおしき有明の月な隔そ峯のうき雲

霧中求泊

〱比良の根の嵐に小舟行なやみなを霧深く泊りもとむる  
〱舟とむる波のうき霧そことなく明石の浦名のみ也けり  
〱立のほる浪の夕霧分侘てみなとさためす舟つなくらん  
〱いつかたにつなき定む蟻小舟霧に隔つる須磨のみなどは  
〱舟つなくあかしの浦は名のみして霧打わたすせとの八十嶋  
〱舟とめて今宵明石はなにたひねせん月をもらせ浦の夕霧  
〱夕霧の立白波のそことなくこゑうちかはしよするとも舟  
〱霧こめて舟指留る梶枕よるへさためぬ和歌の浦人キレ

擣衣妨夢

〱衣うつ音吹送る秋の風になかは見残すこしかたの夢  
〱よを寒みうつや碓の音にのみあたら夢路もおとろかれぬる  
〱渡し得ぬ夢のうき橋幾度かたえて碓の音のつれなき  
〱千里まで通ふ夢路の此ころによさむの衣うちもねられぬ

好時 勝伴 昌誉  
〱さよ衣たか遠近にうち初て見しよの夢をおとろかすらん  
〱たまさかに忍ふ昔の夢をたにしつはた衣うちもさめぬる  
〱我身には碓の音のいとさえて秋の夜すから夢もむすはず  
〱小夜衣してうつ音に夢さめていと、露けき蓬生の宿

伴菊延齡

長松院 提宗 好時 錠女  
〱幾かへり友とみきりに移し植て千年を延る菊の花ふさ  
〱幾千世と契り置てしませの菊に老かよはひをまかせてそ見る  
〱未長き人の齡のませに咲菊や千草のかさし成らん  
〱幾千世を契りをかはや秋毎の友と砌に匂ふしら菊  
〱妹背山老せぬ秋の友なれや盛久しき八重のしら菊妹背山に菊をよみ  
〱仙人もよはひのふると契りにしためしを菊に我もならはん  
〱千世やちよたえぬ色香を菊の露かゝる袂によはひのはへて  
〱諸共に千年のふてふませの内さかり久しく匂ふしら菊

山路秋過

提宗 如風 昌誉 延寿院 勝伴 延寿院 昌誉 長松院 好時 錠女  
〱今登る秋の山路の夕時雨ふり行色をいかにかこたん  
〱字つの山うつり替りて秋くれは紅葉を分る葛の細道  
〱行やられて山路に秋のをしまる、千種の花も枯んとおもへは  
〱立田山峯の紅葉もいつとなきあふささるさに秋そ暮行  
〱分まよふけふも山路の秋の色を詠くらしつ帰るさもいさ  
〱露深き草葉ふみ分足引の山路に秋を過る夕くれ  
〱住馴し秋の山路そ色ふかく過行比のしたきかな  
〱山路にて秋の日はすこしけりむくらの宿に冬や来ぬらん

悔前世恋

如風 錠女 昌誉 好時  
〱前の世の契やさそな深からしくゆる思ひに身こそかかるれ  
〱しらすりき我前の世のむくひ迄思ひ悔るも人の難顔さ  
〱幾度か思ひけしても胸の火にさきの世かけてくゆる侘しさ

へさきの世に結はぬ物かかた糸のあはぬなききを恋侘るの<sup>の</sup>み

如風

へ年高き松の葉ことに吹風はをなししらへも千世に聞らし

勝伴

へ前の世にまかぬ種とや思ひ草露の命は経るかひもなし

提宗

へ四の海浪しつかにも住吉の松吹風も万代の声

如風

へいか斗うすきすく世の恋衣うらみ果たる今のたもととは

昌誉

へ民安く豊かにすめる君か代のなをも壽く松風の声

錠女

へいかに我契りをきしそ前の世にくゆる恋路のうきにつきて<sup>も</sup>

錠女

へ君か代をことふく庭の松風はかはらぬ琴にしらへそふらん

長松院

へ前の世にいかなる神を結びてかかゝる思ひの身とは成し<sup>そ</sup>

勝伴

へときは山吹風も松の陰ふかく治る御代の風はに<sup>きは</sup>ふ

提宗

寄日釈教

へあかねさす日影にめくる法の道心のやみはなをてらすらん

勝伴

てんすへて八十首長七首の中いか斗うすきすくせとうけ

へはてる日影いつに湊のへたてなく深き御法のうてな成らん

長松院

たまはる恋やことにまさるへしとか

へ御仏の光もかくやてる日影なへて恵みのへたてなければ

錠女

小松本善寺 昌誉上

へ朝日影うつる光のへたてなき心の法のをしへかしこし

好時

首夏藤 おしめ共立もとまらぬ名残そと春より夏にかゝる藤浪

へ高き峯か、やく法の朝日影ほとなくてらせ谷のとほそも

昌誉

寄烟恋 終にかくあかての浦の夕けふりたえて思ひの猶もこかる、

へ高野山日かり閑けき法の場にうき世の夢を<sup>ちり</sup>払ふ松風

如風

躑躅 立田川今も錦を春の日といはねのつ、し陰そうつろふ

へ道ひろき御法の光日にそひてともに恵の影はかはらし

提宗

三月尽 ちる花をおしむはかりかけふは又春もつきねと入相の鐘

寄月神祇

へ曇りなき神路の山の<sup>夕月</sup>に心をみかく露のたまかき

提宗

樽 むらさきの雲の林の名に高く法にあふちの花を匂へる

へ雲霧は松の嵐に吹はれて月住吉の舞の乙女子

延寿院

早苗 薄くこく色をわかちて植渡す早稲田おく手の露の玉なへ

へ曇りなき三笠の山の月影に神の恵もともに澄らん

如風

五月五日 唐を爰にうつしてますか、み玉江のあやめけふそ引みん

へ隅なくも月すみ渡る神風やみもすそ河の末の世<sup>ま</sup>かけて

錠女

五月雨 つれ／＼と幾日重てふるき世をしたふ限りは五月雨の比

へ神風やきねか鞍も高砂のおのへの月にすめるみかくら

長松院

年頃したしき人のいたはる事ありて夏のなかに身まかり給ふけ

へちはやふる神のみかけそ有明の月さへすめる朱の玉かき

好時

るに ありし事共思ひつ、けはいとも哀れにはかなく覚へければ

へ月更て影もすむ也住吉のこゝろをみかく朱の玉垣

勝伴

夏ふかきを思ふといふ心をよみ侍る <sup>は</sup>新屋敷一友相果申候故

へかしこしなよ、の光の言のはに月も曇らぬ玉つ鳴姫

昌誉

追善 五月雨のふるき言の葉しければぬれつ、袖に忍ふ夕露

松有歓声

へ風の糸長くもか、れ住吉の松にしらへる万代の声

昌誉

香園寺の桜を見にまかりけるに あるししける僧の 此春のはし

へ豊なる御代のためしを聞こにしらへあやある松風の声

好時

めはかなく過給ひける事共思ひ出し 花の色香もいと哀れにおほ

へ

好時

えければ

思ふそよ常なき花の桜木も過し昔の春は忘れず

思ふそよ名のみ残りて古寺の花にかたらむ過し昔も

おもふそよ有し昔の言のはを忍ふたむけの花によそへて

思ふそよ春や昔と桜花園にかへりぬる跡を見るにも

思ふそよかゝる浮世を昔そと花の台にきよくすまんと

思ふそよ色も替らて桜花ぬしは昔ときえしはかなさ

思ふそよ桜は雪とふる寺の過にしかたを忍ふたむけに

思ふそよ花は昔に替らねとぬしをなのみにうつるはかなさ

山吹

思ひやる井手の玉川春ふかみうつろふ色の山ふきの花

右の歌は 不残長点にて御座候

みつちか去年の名月少くもりたるを見給ひて

世のうきにくもる心もはれて見む月さへ今宵空にへたて、

はれて見る世のうき雲はかゝる共とはには月の影は隔てし

菊月十三夜

月影を雲なへたてそ唐人もしらぬ今宵の名を思ふ夜に

寂中のみか又影おほふうき雲にうらみかさなる長月の空

女郎花 靨露

おみなへしたてるすかたもあかなくによそひそへぬる野辺の夕露

野 鹿

終夜山より出て鳴鹿はふもとの野辺に妻やこもれる

秋逢恋

逢事は夜永き秋に待えても猶ことのはやあすに残らん

〔寛保元酉秋冷泉大納言為久卿関東御下向の歌〕

〔似雲詠歌四首〕

〔略〕

〔略〕

如 風

延 寿 院

長 松 院

貞 昌

れ ん

永 輪

ぜ う

昌 誉

光 似

(昭和五十九年十月十一日 受理)

石岡八幡宮の和歌資料

柿本明神奉納詠



神祇講詠草

